
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 56

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1101. あの鳥のように、あのカメのように
- 1102. 曲を貫く美的法則
- 1103. 夢:ある彫刻家の生き様と突き上げる稲妻
- 1104. 新たな知的植民地政策の脅威:MOOC
- 1105. ジョン・デューイから
- 1106. 菌の死守
- 1107. インナ・セメツキーの「教育記号論(edusemiotics)」との出会い
- 1108. 精神空間に張り巡らされる無尽蔵の根
- 1109. 先人の固有性を感得すること
- 1110. 書齋と自然が作る開放系システム
- 1111. 行き場のない憤り
- 1112. 父と私
- 1113. 冷蔵庫とデイヴィッド・ウィザリントンの論文より
- 1114. 発達段階の存在に関する議論
- 1115. ある僧院での出来事
- 1116. 井筒俊彦の『コーラン』の読みから
- 1117. 人間の残虐性と正義心について:埴谷雄高著『死霊』の到着
- 1118. 言葉を越えたその先
- 1119. 『成人発達理論による能力の成長』の主題の断片
- 1120. 認知的な夢

1101. あの鳥のように、あのカメのように

一日が終わってしまうことを惜しむような自分がある一方で、新たな一日がやってくることも惜しむような自分がある。つまり、時間など流れて欲しくはないと願うような自分があるようなのだ。

現在の私は、自分の探究活動に没頭することによっていつの間にか一日が終わっていた、というような形で毎日を過ごしている。実際のところ、一日が終わりに差し掛かっているにもかかわらず探究の手を止めたくないという願うような自分がいつもいる。寝ても覚めても探究活動を通じた仕事に没頭していても、それでも私はまだ、時間の流れの中で日々の仕事を行なっているように思える。どのようにしたら時間を超越した形で日々の仕事を行えるのだろうか。

その一点が大きなテーマとして私にのしかかっている。また、探究活動にいくら没頭していても、文章を読むことと書くことに関する身体的・精神的な限界というものが必ずどこかでやってくる。そうした限界を感じさせる感覚器官そのものを取り払うことができるのだろうか。また、それを取り払ったとしたら、私の探究活動はどのような質と量を持つものに変容するのだろうか。そのようなことを考えていた。

今日からまた一つ、とても些細だが、新たな食べ物を一週間の中の食事に取り入れることにした。先日、私と同じ論文アドバイザーに師事して研究を行なっている、博士課程に所属するインドネシア人のニックという友人から、フローニンゲンの街の中心部に美味しいインドネシア料理店があることを聞いた。私は中学生時代にインドネシアを訪れて以来、この国の料理に対して好意的な印象を持ち続けている。午前中の仕事を済ませ、ランニングに出かけた帰りに、そのインドネシア料理店に立ち寄り、昼食を持ち帰ることにした。

今日から、一週間に一度、ランニングに出かけた後は必ずこのインドネシア料理店で昼食を注文するという決めにした。これはおそらく、フローニンゲンにいる間中続く習慣となるかもしれない。実際に、私がロサンゼルス近郊のアーバインという街で生活していた時、一週間に一度、ランニングに出かけた後は必ず近所の韓国料理店で昼食を注文するという習慣があった。一週間に一度の昼食は、普段の昼食とは分類の異なるものを摂取したいと思う。

インドネシア料理店の店員と早速少しばかり会話をし、店員の親切さと店の雰囲気から、新しい食生活が始まることを確信した。店を後にし、手に持ったインドネシア料理の香りがほのかに立ち込めるのを感じながら、意気揚々と私は自宅に戻ることにした。その帰り道、今日の天気がとても優れているからだろうか、フローニンゲンの街に住む学生たちが、家から椅子やソファを外に持ち出して、日光浴をしながら外で勉強している姿をちらほら見かけた。

その光景を眺めながら、「ああ、こういう学習の仕方も良いものだ」と改めて思った。そのようなことを思った瞬間に、四年前に米国のイエール大学を訪れた時の記憶が蘇ってきた。イエール大学のキャンパスの中でもひととき静かな緑に囲まれた場所の中に、木でできたテーブルと椅子が置かれているのを発見した私は、そこに腰掛け、テーブルの上にノートを広げ始めた。取り巻く環境がとても静かであり、部屋の中とは違って非常に開放的であった。

そうした静けさと開放さが相まって、私の思考はどこまでも深く、そしてどこまでも広く運動を開始し始めたのを今でも鮮明に覚えている。フローニンゲンの街の学生が外で勉強している様子と、そこから喚起された記憶とが相まって、書斎の外に出て書物をゆっくり読んだり、思索を深めたりすることは時に有意義だと改めて思った。

最後に、インドネシア料理店からの帰り道、一つ感動的な出来事に遭遇した。それは、先日に書き留めた日記で登場した、鳥の親子の巣の話と関係している。今日、改めてその運河の前を通ったところ、二人の通行人がその巣を指差しているのが見えた。指差す方向におもむろに近寄ってみると、そこには鳥の親子はすでにいなかった。

しかし、そこには二匹のカメがいたのだ。二匹のカメの大きさから察するに、それは親子であった。二匹のカメは、あの父鳥が作り上げた巣の上で日向ぼっこをしていたのである。その姿に、私は妙に打たれるものがあり、仕事の尊さを改めて感じた。

二匹のカメが今このようにして太陽の光を全身に浴び、幸福さの中で生きていられることの背後には、あの父鳥の仕事があるのだ。この二匹のカメは、父鳥の存在など知らないはずだろうし、運河に浮かぶこの小さな休憩場が、一羽の鳥の仕事の産物であることなど知るはずもないだろう。また、あ

の父鳥にしてみても、自分の仕事がこの二匹のカメの生を彩るものになるなどとは思ってもいなかったに違いない。まさにこれなのだ。これこそが仕事の意義と価値だと思うのだ。

この具体的な事例を目の当たりにした時、もはや仕事の意義と価値についての追加の説明など不要だろう。私は、あの父鳥のようにならなければならない。そして、私はいつでも先人の仕事によって支えられた、あの二匹のカメのような存在であるということを絶えず自覚しながら生きたいと思う。それがこの世界で仕事をするということであり、この世界で生きることだと思うのだ。2017/5/26

1102. 曲を貫く美的法則

「何かを作り出すということはこれほどまでに大きな喜びをもたらすことなのだ」と思わずにはいられなかった。作曲の手を止め、そこでの感動が残っているうちに、それについて書き留めておきたい。

先ほど、五線譜上に曲を作っている最中、歴史に耐えた過去の様々な偉大な曲を五線譜上に再現するだけでも、なぜだか私は大きな喜びの感情に包まれていた。音符を五線譜上に並べるとのことそのものが喜びをもたらし、それがまるで一つの生命のように音を奏でることはさらに大きな喜びの感情を私にもたらした。

一つ忘れられない感動体験があった。それは、私がテキストに掲載されていたアメリカのフォークソングを五線譜上に再現した際に起こった。作曲ソフト上の五線譜の上に音符を並べ終えた後、それを再生した時、何かの手違いで最後の音が出力されなかった。しかし、曲を再生している最中の私の頭の中では、最後の音がどのような音として立ち現れるのかがすでにわかっていた。

そうなのだ、それはもうわかっていたのだ。実際には聞こえなかった音が、もうその時の私の頭の中に鳴っていたのだ。実際に、出力の手違いを修正し、もう一度再生をしてみると、まさに私が頭の中で聞いていた音が鳴り響いた。これは私のように音楽教育を一切受けていない者にとって驚きだった。

やはり、音楽は美的法則性に貫かれている。それを直接体験によって証明するかのような出来事だった。こんな小さなことが、今の私にとっては大きな喜びをもたらす。いや、もしかすると、これは非常に重要なことなのかもしれない。

並べられた音符を眺めていると、「それらがそこにそのように」並べられていることは偶然性によってもたらされたのではなく、必然性によってもたらされたことを知る。それではその必然性とは何かというと、音楽を貫く、そして、一つの曲を貫く美的法則である。

ひとたびこの法則性に音が乗り出すと、それはもう必然的にあるべき最終形態に向かって姿を現し始めるのだ。「それが来たら次はこれ」であり、「あれが来たら次はそれ」なのだ。私にとって、この美的法則が驚異的なものに映るのは、それは「あれ」と「これ」の接着剤、もしくは促進剤としての働きを静かに担っているということであり、決して「あれ」と「これ」そのものを指示しないということなのだ。

つまり、一つの音符が五線譜上に置かれた時、確かにその次に来る音符の種類と位置は、美的法則に基づいてその無限の可能性が有限の可能性に絞られる。だが美的法則は、決してそれらの絶対的な種類と位置を明示するものではなく、作曲者の感性や自由意志が入り込む余地を残したもののなのだ。そうした余地を残しながらも、一つの音符と次の音符が次々と一つの必然的な流れをなしていくことの中に、その美的法則が宿るのだと思う。

とにかく私が毎日行いたいことは、一つの曲（あるいは一つの節）を貫く美的法則を意識的に把握することであり、その体験を積み重ねていくことである。音楽を貫く究極的な美的法則は、おそらく一つの巨大なものだと思うが、そうした法則を構成する小さな法則群が存在しているように思う。そのため、日々の作曲実践の際に、小さな美的法則を見逃すことなくつぶさに捕まえていくことを行いたい。音楽に宿る美的法則に触れることが、これほどまでに大きな喜びを私にもたらすのだと改めて身にしみるように感じていた。2017/5/26

1103. 夢:ある彫刻家の生き様と突き上げる稲妻

稲妻が身体を突き上げるような夢を見た。稲妻に打たれるのではなく、稲妻が身体の底から頭のとっぺんへ向けて突き抜けるような夢だった。

昨日、「ここ最近では記憶に残る夢をあまり見ない。もしかしたら今夜は印象的な夢を見るかもしれない」と予期していた通りの事態に見舞われた。昨夜の夢の中、マグマを彷彿とさせるドロドロとした熱いエネルギーが完全に浄化された後に生まれるような黄色いエネルギーが私の身体を駆け巡った時、私は絵も言わぬ感動と歓喜に包まれていた。

覚えている範囲で、昨夜の夢について書き留めておく。夢の中で私は、ある彫刻家の作品が保存されている寺のような場所にいた。その寺には、その彫刻家の作品が展示されているだけではなく、その彫刻家にまつわる家系図やエピソードが記された資料が展示されていた。私がふと足を止めたのは、その彫刻家にまつわるエピソードに関する資料だった。

その資料は、大判の画用紙ぐらいの大きさであり、画用紙の三つの段の左右にそれぞれ写真が掲載され、説明文が添えられていた。その資料を読んでいると、ふと旧友が私の横に現れた。

旧友:「この彫刻家の作品は何か感じるものがあるよね」

私:「えっ、この彫刻家のことを知ってたの？」

旧友:「うん。この彫刻家はすごく有名な人物だよ。小さい頃からちよくちよく、この彫刻家の名前をいろんなところで目にするよ」

私:「そうなんだ。それにしても、この中段の写真は・・・」

旧友:「これはすごいよね。作品を見て何かを感じた人たちが、こんなにもたくさんこの彫刻家の葬儀に参加するなんて。この彫刻家の作品には人を動かさずにはいられない物語がきつとあるんだよ」

私は、旧友のその言葉を聞いて、彫刻家の生き様に思いを馳せた。同時に、この彫刻家が一つ一つの作品の中に物語を表現したということ、そして動かぬ彫刻が多くの人々の人生を動かしたという事実打たれるものがあった。

旧友:「こんな日本人もいたんだよ。とんでもない創造エネルギーに駆り立てられて生きた日本人がいたんだよ」

旧友のその言葉を聞いた瞬間、それが起こった。私の身体の底の底、存在の底の底から、強烈なエネルギーが産道を通る赤子のように昇り始めたのだ。閃光のようなエネルギーが一挙に私の身体

を駆け上がった後、さらに強烈なエネルギーが下から上へとじわじわと昇っていく中に私はいた。その時、私はもはや寺にはいなかった。

時間も空間もない、「場所ではない場所」に私はいた。そこは、存在の粒子だけが生きられるような場所だった。どれだけそこにとどまっていたのかはわからない。そこから再び寺に戻ってきた時、資料館ではなく寺の外に私は立っていた。その彫刻家が残した一つの傑作が、天にも届くような大きさとなって、寺の背後にたたずんでいた。

それは夢の中の私の幻覚であったが、それは事実でもあった。寺の背後に透き通ってたたずむ、この彫刻家の作品をある種の放心状態で私は眺めていた。放心状態の中、身体を突き上げた稲妻のような強烈なエネルギーに感極まっていた私は、涙を流していることに気づいた。そこで私は夢から覚めた。

寝室の窓から真っ赤な朝日が見える。しかし私には、真っ赤な朝日さえも霞んでしまうかのような、内側の朝日を見出していた。

「こんな日本人もいたんだよ。とんでもない創造エネルギーに駆り立てられて生きた日本人がいたんだよ」という旧友の言葉が今も私の耳に焼き付いている。2017/5/27

【追記】

今私はフローニンゲン空港のロビーにいて、ロンドンに向かうフライトを待っている。広大な青空がロビーの窓から見える。所々に真っ白なちぎれ雲が浮かんでいる。

上記の日記を読んだ時、私はそこに書かれている夢の中で感じていた感動を改めて今この瞬間においても感じた。この夢は本当に印象に残っている夢だ。もう一年も前に見た夢なのに、今でもその時の感動を覚えている。上記の夢の中に現れているシンボルと主題について、私はもう語る必要もないほどにそこに内包されている意味と真実が何かを分かっている。

今回ロンドンに行くのも、夢で示唆されている意味と真実に忠実に生きるためだ。あるいは、あの夢が私に指示していたことを着実に実行・実現させるためにあるのが今回のロンドン旅行だ。あと30分ほどでロンドン行きのフライトの搭乗が始まる。フローニンゲン空港:2018/6/20(水)09:52

春をひとつ飛びにし、夏がやってきたかのような土曜日だった。早朝から雲ひとつない青空が広がり、五時半に起床した時にはすでに辺りが明るかった。午前中から、夏を彷彿させるような日差しが辺りに降り注ぎ、しかしそれでいて涼しい風が流れていた。そのような土曜日の朝、私はカントの“Critique of Pure Reason (1781)”の一ページを手で書き写すという毎朝の習慣を真っ先に行った。

カントが残したこの傑作を手で書き写していると、そういえば私の一日は、偉大な先人の仕事に触れることから始まり、そして一日が終わることに気づいた。というのも、一日の終わりに関しては、現在はベートーヴェンが残した楽譜を五線譜上に自分で再現するというところに行っているからである。

一日の最初と最後の実践はともに、過去の偉大な先人の仕事に触れる形でなされていることに気づいた。少しばかり心境の変化があり、現在、モーツァルトのピアノソナタが生み出す全体美の美しさを再発見し、モーツァルトの楽譜が届いたら、その全体美を解析する形で一日を終えることになるかもしれない。ベートーヴェンがハイドンやモーツァルトの仕事に対して行ったのと同様の解析作業を、私もモーツァルトの仕事に対して行ってみたいと思う。

その後、午前中は全ての時間を使って、MOOC(大規模オープン・オンライン・コース)に関する論文を四本ほど読んでいた。これらの論文は、フローニンゲン大学のMOOCの技術部門の責任者の方から以前に共有してもらったものである。

フローニンゲン大学で過ごす二年目の研究テーマの一つは、MOOCの中で起こっている学習プロセスに対してダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクス的手法を活用することにある。そのため、この時期に少しばかりMOOCに関する先行研究の様子を確認しておきたいと思った。論文を読みながら、MOOCの歴史や現状を含めて、何かと面白い知識が得られたが、それらの知識は私にとってそれほど重要なことではなかった。先行研究を眺めながら、やはり既存の研究では、学習プロセスを捉えていくという視点が欠落しており、どの研究も単純なグループ間比較に終始し、結局、個人に固有の学習プロセスを探究するような研究はほとんどないことがわかった。

そこに、私が現在専門としているダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスの発想と手法が貢献できる余地が多分にあると思った。数日前に、大学のデータベースを通じて、MOOCが初め

て公になった2008年以降から現在にかけての大多数の論文の概略に目を通して見たところ、私に関心を持っているテーマがMOOCに関する既存の研究領域にはポツカリと抜けていることがわかった。

それがわかった時、「これが自分のなすべきことのひとつだ」という強い思いが湧き上がった。MOOCに関しては実のところ、全世界にオンラインで教育プログラムが提供できるという肯定的な側面のみならず、政治経済的な観点から見ると、新たな「知的植民地政策」の様相を呈しかねないという否定的な側面もある。

確かに、私は九月からMOOCに関して、MOOCの中で見られる固有の学習プロセスと学習メカニズムを複雑性科学の観点から研究をしていくが、同時並行的に、MOOCにまつわる教育思想と政策的な仕組みについても探究を深めていきたいと思っている。それはなぜなら、上述のように、「オンラインで教育プログラムを全世界の多くの人に提供することができる」という表向きのメッセージとは裏腹に、MOOCには政治経済的な問題が内在しているからである。

MOOCによって世界の多くの人に教育プログラムが提供されうるということは、コンテンツの提供を通じて、現在以上に偏狭的な世界が構築されうるという危険性があるように思う。まさに、フローニンゲン大学のMOOCの担当者と以前話した時に、その人がMOOCは一部の関係者の中で「大規模オープン・オンライン・植民地政策 (Masive Open Online Colonization)」と呼ばれているという話を聞き、この問題は私の現在の大きな関心の一つになっている。

この九月から、MOOCに関する科学的な研究をする一方で、MOOCに関する哲学的な研究も同時に行っていかなければならない。今後MOOCのコンテンツは、組織人向けのものも拡張されると予想され、例えば、欧米のビジネススクールが本格的にMOOCに参入し始めたら、金融資本主義と相まって、その植民地政策は知的空間のみならず実物空間にまで拡張され、その勢いがますます加速されうるという脅威がある。2017/5/27

1105. ジョン・デューイから

午前中、人間発達と教育に関する論文を読みながら、やはりこの領域が自分の最大の関心の的であることを知った。教育思想家のジョン・デューイが、「政治、倫理、美的問題など、哲学上の最も重

要な問題の全ては教育の問題と密接に関係している」という指摘に対して少しばかり立ち止まって考える自分がいた。

教育を取り巻く問題は、哲学上の多岐にわたる問題とつながっており、それは同時に、他の多様な学術領域と実践領域とも分かち難く繋がっている。また、「社会の基礎的構造の全ては教育的なものである」というデューイの指摘も非常に洞察に富んでいる。これはすなわち、社会で共有される思想や仕組みが私たちのあり方や思考の枠組みに直接的に作用することを意味する。同時に、社会で広まるソーシャルメディアや各種の製品を活用することによって、私たちのあり方や思考の枠組みが規定されるという精神的な意味での作用のみならず、それはすなわち、私たちの脳の構造や機能にまで作用するという物理的・身体的な意味での作用を持つ。

この論点が内包する社会問題について以前から関心があり、例えば、ソーシャルメディアに依存する人たちの思考形態の歪さと、そうした思考形態を生み出す脳の構造的な特徴について関心があった。この例はまさに、ソーシャルメディアという社会の基礎的構造が産み出したものが、私たちの身体(脳)・精神(心)を避けようもなく強固に形作っていることを示唆している。

教育が持つ役割の一つに、私たちの脳と心を形成していくことがあるのであれば、まさにデューイの上記の指摘は正鵠を射ている。そうしたことから、私はデューイの思想をより深く探究したいと改めて思うようになった。

今から四年前、サンフランシスコの坂道で得た啓示が、ようやく私の中で形となって現れ始めている。一昨年において日本に滞在していた時に購入した、デューイの全集“The Essential Dewey Volume 1: Pragmatism, Education, Democracy (1998)”と“The Essential Dewey Volume 2: Ethics, Logic, Psychology (1998)”を、この夏激しく読むことになるだろう。

一昨年に購入したそれらの書籍の中身は、現在何の書き込みもなくまっさらである。ようやくデューイの思想と向き合う時期にきた。また、私の内側で、デューイという教育思想の巨人を皮切りに、様々な教育思想家の哲学体系を渡り歩き、現代社会が抱える問題に適応可能な実践的教育哲学の道を模索したいと思う。2017/5/27

1106. 菌の死守

白く、黄色い一筋の稲妻が地上に落ちるのを知覚して今朝は目覚めた。早朝、落雷がフローニンゲンの街を襲い、突発的な雨が降った。時間としてはとても短かったが、それは私の印象に強く残っている。私は太陽の光によって目覚めるようにしているため、いつも寝室のカーテンは開いたままである。

そのため、今朝の未明に襲った稲妻の色彩が、目を閉じていても知覚されたのであった。実は、今朝はその前にもう一度だけ目が覚めることがあった。昨夜の夢の中で、自分が攻撃性を人に発揮するシーンがあり、それによって目覚めた。少なくともひと月に一度の頻度でこうした攻撃性に関する夢を見ているように思う。

こうした夢は否定的に受け取ってしまいがちであるが、自分の中にある攻撃性は、時に創造活動を支える重要なエネルギー源であることに気づく。これは誰だったか忘れたが、ピカソだったか、ダリだったか、いずれにせよ偉大な芸術家のある人物が、「精神分析を受けることによって、自分の攻撃性や抑圧した感情が治癒されてしまうと、創造活動が枯渇してしまう」と指摘し、精神分析を極度に避けたという話を聞いたことがある。

それはとても納得のいく話だと最近よく思う。往々にして、自らが内在的に持つ攻撃衝動(破壊衝動)や抑圧した感情というのは強烈なエネルギーを内に秘めている。偉大な芸術家は、そうしたエネルギーをもとに創造的な活動に従事していることが多いように思う。これは芸術家のみならず、研究者等を含め、自分の内側にあるものを外側に形として表現することを求められる人たちにも当てはまることだと思う。

「精神を治癒する」というのは聞こえはいいが、手当たり次第に治癒を施せばいいというものではない。菌は菌でも、善玉菌が私たちの体内にいるのと同じように、そして、それらを取り除いてしまえば身体が機能不全に陥ってしまうのと同じように、私たちの精神内に存在する菌を無配慮に除去するというのは問題がある。昨夜の夢を思い出しながら、私は、自分の精神内に存在する菌を今後も守り抜きたいと思っていた。

今日は午前中に、修士論文の最終ドラフトの確認を行いたい。先日、一度全てに目を通したのだが、今日はもう一度全ての文章に目を通し、追加・修正があればそれを施しておきたい。それが完

成すれば、明日の昼に、論文アドバイザーのサスキア・クネン教授にドラフトを提出する。修士論文のドラフトが完成したら、午後からは、「タレントアセスメント」のコースで課せられている論文に取り組みたい。

こちらもすでにドラフトができあがっており、数日間ほど寝かせておいた。十分に寝かせたという感覚が私の中にあるため、最初から最後まで再び読み返すのは今日が最適だと思う。データ結果を掲載した表や細かな文言を含め、丹念に読み返す作業をしたい。こうした論文執筆がひと段落したら、残りの時間は、複雑性科学と教育哲学を架橋した専門書“Complexity Theory and The Philosophy of Education (2008)”と、複雑性科学と発達科学に関する思想的研究を行っているデイヴィッド・ウィザリントンの論文を何本か読み進めたい。

今日は、早朝の稲妻による起床から始まり、文章を書いて読むことによって終わる、爽やかな春の日曜日になるだろう。2017/5/28

1107. インナ・セメツキーの「教育記号論(edusemiotics)」との出会い

昨日、教育哲学者のジョン・デューイについて少しばかり書き留めていたように思う。“Complexity Theory and The Philosophy of Education (2008)”を読めば読むほどに、デューイが複雑性科学と教育哲学を架橋するような極めて洞察に溢れる指摘を数多く残していることに気づき、大きな感銘を受けた。

例えば、「知識とは単なる所与の事実に還元されるようなものではなく、それは知る者と知られるものとの相互作用をもたらす」という言葉を一つ取ってみても、複雑性科学の発想に相通じるものが如実に表れている。こうした言葉以外にも、デューイが残した教育哲学の節々に複雑性科学の発想が見て取れる。

私自身、複雑性科学を探究することによって、世界を認識する枠組みが随分と変化したように思うのだが、その変化はデューイの思想体系をまた違った観点から眺めることを可能にしているようだ。そのため、デューイの思想のあちらこちらに複雑性科学の発想を見出すことができ、同時に、デューイの思想体系をより深く探究していこうという気持ちが湧き上がったのである。

実は、こうした気づきをもたらしたのは、書斎の本棚に所蔵されている、インディアナ大学出版から刊行されているデューイの二冊の全集を私が直接読んで得られたものではなく、“Complexity Theory and The Philosophy of Education (2008)”に収められている“Re-reading Dewey through the Lens of Complexity Science, or: On the Creative Logic of Education”という論文を読むことによって得られたものだ。

正直なところ、昨日は、この論文を読んで大きな衝撃を受けていた。それはもちろん、この論文によって、デューイが複雑性科学の発想を持ちながら教育哲学を打ち立てていたということに対する驚きもありながら、それ以上に、この論文の著者であるインナ・セメツキーという女性哲学者の仕事そのものに大変感化されたのだ。

私はセメツキーの名前を昨日初めて耳にし、初めて彼女の仕事を目にするようになった。セメツキーの仕事が今の私にとって重要だと一瞬でわかったのは、彼女が辿ってきた哲学者は私が以前から関心を寄せる哲学者であることと、それらの哲学者の思想体系をもとに、非常に独自の教育哲学を彼女が打ち立てていることがきっかけであった。

セメツキーは、記号論の領域に多大な貢献を果たしたチャールズ・サンダース・パース、教育哲学者のジョン・デューイ、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ、米国の哲学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの思想体系を探究しながら、「教育記号論(edusemiotics)」という独自の教育哲学を確立している。セメツキーが辿っていった哲学者の全てが、まさに私がこれまで着目していた人物たちであり、実際に、書斎の本棚には彼らが執筆した哲学書が並んでいる。そうしたことから、セメツキーの仕事に強い関心と共感の念を持ち、彼女の主著を六冊ほど購入することにした。

セメツキーが提唱した「教育記号論」というものが非常に気になるのと同時に、セメツキーの仕事の起点として、上記の哲学者が展開した教育思想について自分なりに探究を進めていきたいと思う。

2017/5/28

【追記】

いつか複雑性科学の発想とデューイの教育哲学を架橋するような論文を執筆したい。それに向けて、複雑性科学の発想の理解をさらに深め、デューイの教育哲学の体系を深く理解することに努めなければならない。

1108. 精神空間に張り巡らされる無尽蔵の根

うようよとした無尽蔵の根が、自分の精神空間の深部に張り巡らされていくようなイメージが見えた。そして、そうした無限の根そのものが自己の本源を示すイメージなのだとすることに気づいた。

私たちは毎日、様々なことを考えることを通じて無数のイメージを知覚している。そもそも、思考するというのは何かをイメージすることに他ならないため、絶えず私たちはイメージの世界の中にいると言えるかもしれない。

昨夜の就寝前に、イメージの世界とそうでないものの区別を明確にしようと思ったが、その区別は極めて曖昧であり、もはや区別など存在しないのかもしれないと思った。それよりもむしろ、思考するということが何かをイメージすることに他ならないのであれば、自分が認識する世界は全てイメージの世界だという観念論にも似た極端な発想が浮かび上がってきた。

いずれにせよ、私たちの内側で絶えずイメージが湧き上がり、それが無数の根のような形となって精神空間の深部に張り巡らされていく様子には私は驚いていた。精神の地下に、現在進行形で張り巡らされていく根っこの一つ一つを辿っていくと、どのようなことがわかるのだろうか？そのような問いが私の中で立ち上がった。

フランスの哲学者ガストン・バシュラールは、「私たちは観念世界に帰属しているよりはるかに強くイメージ世界に帰属しており、イメージ世界のほうがはるかに私たちの存在を構成しているのである」と述べている。この言葉を思い出した時、先ほどの私は思考を司る観念世界とイメージを司るイメージ世界を混同しているようだった。私が述べたかったのは、バシュラールの指摘するようなイメージ世界の存在であり、そうしたイメージ世界の中に無尽蔵の根が現在進行形で張り巡らされていくような姿を指摘したかった。

まさに日々の活動の中で多様なイメージが常に生起しており、それを文字の形として残しておくことへの興味から、私は毎日日記を書いていると思う。植物が成長する姿を毎日毎日眺めるかのごとく、自分の精神空間の地下に張り巡らされていく根の様子を毎日毎日観察していくのである。同時に、過去の記憶や夢をきっかけとして、過去の出来事を通じて張り巡らされていた既存の根や無意識の層にある根を観察することも行なっていきたい、あるいはもはやそれを行わなければ精神生活を送っていくことができない、という状況に今の私は置かれているようなのだ。

それゆえに、過去・現在・未来や潜在意識・顕在意識といった区別にかかわらず、とにかく自分の内側に存在する根っこが一体どういったものであり、それがどのようなつながりを見せ、また今後どのようにつながっていくのかをただただ観察したいのだ。そのようなことをふと思わされた。

これから一冊の専門書を少しばかり読み進めたいと思う。少しばかり上記の話題に影響を受け、今後少しずつある実験的な試みをしたいと思う。

専門書や論文を読み返してみると、自分にとって重要な箇所の下線が引かれていたり、書き込みがなされていることをよく見かける。仮に、そうした自分にとって重要な箇所を三つから五つほど無作為に選び、それらを組み合わせる形で一つの文章に仕立てていくとどのようなことが起こるのだろうか？という関心が湧いてきた。

人間の持つ連想力は不思議な力を持っており、全く無関係に思える事柄でもそれらを結びつけるような働きをする。そうした連想力を活用して、無作為に選んだ文章からまた一つ新しい根を育んでいくような試みをしてみたいとふと思った。

理想的には、同一の論文や専門書ではなく、論文や専門書すらも無作為に複数選び、そこから自分にとって重要な文章をいくつか抽出し、それらを組み合わせると何か文書を書くことをしてみたい。これまで気づけなかったが、これは学術論文や書籍を執筆する際に、これまで私が無意識的に行っていたことのように思えた。これからは、それを意識的に試みてみたいと思う。2017/5/28

1109. 先人の固有性を感得すること

季節という一つの巨大なダイナミックシステムが非線形的な変化を遂げ、フローニンゲンの街にも新たな季節が突然やってきた。春を乗り越えて初夏を思わせるような日曜日であった。早朝から終始一貫して晴天に恵まれ、書斎の窓の外に広がる景色は夏の様相を呈していた。季節が変わろうとも、仮に世間が今日という日を日曜日とみなそうとも、私は自分の探究活動に毎日邁進するだけである。

以前の日記で書き留めていたように、もはや自分が行う探究は自己本位の探究という性格を逸し、常に社会へ基軸を置いたものに変貌を遂げつつある。自己への奉仕と社会への奉仕とが同一のものになり始めているのだ。

午前中、まずは“Complexity Theory and The Philosophy of Education (2008)”の続きの章を一つ読んだ。今日読み進めていたのは、哲学者のミシェル・フーコーの哲学思想と複雑性科学の発想との接点である。

昨日、教育哲学者のジョン・デューイが複雑性科学の思想を深い次元で持っていたことに関する気づきを得た。今朝の読書を通じて、それと同様に、フーコーも複雑性科学の思想を持っていたことに気づかされた。フーコーの哲学書に関しても、一昨年に日本で購入していたにもかかわらず、まだほとんど手がつけられていない。しかし、デューイと同様にフーコーも、複雑性科学という私の核となる関心事項を結節点として非常に近い存在になり始めている。

この夏私は、デューイのみならず、フーコーの思想体系にも分け入って行くことになるだろう。フーコーの思想と複雑性科学との関係性に関する論文を読み終えた後、私は修士論文のドラフトの完成に向けて作業を始めた。幸いにも、午後にドラフトが完成し、早速論文アドバイザーのサスキア・クネン教授にドラフトを提出した。同時に、次回のミーティングで話し合うテーマとして、一つ相談事を持ちかけた。

それは、この修士論文をもとに査読付き論文を執筆した際に、どのジャーナルに投稿するのが良いかというものだ。実際には、それよりも重要な問題として、その査読付き論文を科学者のみならず多くの実務家が読めるように、近年普及し始めているオンラインジャーナルに投稿した方がいいのか、

今後の学術世界での活動を考えた際に、権威のあるジャーナルに投稿した方がいいのか、その辺りについて次回のミーティングでクネン先生の意見を伺おうと思う。

先生へのメールを送信した後、私は休憩として、ベートーヴェンのピアノソナタに関する解説書を読み始めた。それを読みながら、作曲にあたってまずは、「ベートーヴェン的なもの」「モーツァルト的なもの」「バッハ的なもの」「ショパン的なもの」というように、過去の偉大な作曲家の固有性を感得していくことが大事だと思った。

作曲を通じて、自分の固有性を見出す前に、必ず過去の偉人の固有性を掴んでおかなければ深みに到達することはできないように思う。過去の偉人が精進と継承の末に築き上げてきた音楽体系を深く理解しなければ、自分が納得するものを生み出すことはできないことを知る。現在は、ベートーヴェンの楽譜を自分の手で忠実に再現するということを行っているが、これと同様のことを、その他の偉大な作曲家に対しても徹底的に行うべきだろう。偉人が構築した各人固有の音楽体系を参照する中で、自分独自の音楽体系を少しずつ構築していくのだ。

そのようなことを考えてみると、このプロセスは学術論文の執筆と何ら変わることがないことを知る。学術論文を執筆する際に、自分がそれを執筆しなければならないという強烈な思いと同時に、それを具現化させる際には、必ず先人の仕事を参照することが必要になる。先人が長い年月をかけて築き上げてきた体系のその上に、自分の表現したいものを積み上げていくのである。自己の独自性を見出し、それを意味のある形で表現するためには、先人が残した体系を汲み尽くすことから始めなければならない。2017/5/28

1110. 書齋と自然が作る開放系システム

昼食前にふと、左の首筋に少しばかり痛みを感じた。その痛みは往々にして、読むことと書くことに長期間にわたって没入していた時に生じる。それは、活字情報の飽和を知らせるサインのようなものである。たいていの場合、私はこのサインが出てくるまで読むことと書くことをやめない。

先ほどそのサインが出たことに気づいたので、少しだけ休憩を取ることにした。「成人発達とキャリアディベロップメント」でお世話になっているアニータ・ケラー教授に先日質問した内容をもとにすれば、私は「ワーカホリック」の状態ではなく、「ワークエンゲイジメント」の状態だと言える。両者の主な

違いは、活動に従事する際に否定的な感情を持っているのか、肯定的な感情を持っているのかにある。欧州に渡って以降、私の生活は今まで以上に規律と克己に満たされたものになっている。その様子はどこか、修道僧の生活を彷彿とさせる。こうした生活態度こそが、私が最も望むものであった。

全てが今日から始まるという気持ちと共に起床し、仕事への無心的没入、そして祈りにも似た気持ちを持って就寝すること。この三つを主な構成要素として一日が過ぎていく。この生活態度はもはや今後一生続くに違いない。

活字情報の飽和状態を鎮めるために、私は休憩を取りながら、書斎の外の景色をぼんやりと眺めていた。その時、自分が毎日毎日、精力的に己の探究活動に打ち込むことができているのは、書斎の開放的な窓から広大な空を常に眺めることができることと関係しているかもしれない、と思わずにはいられなかった。確かに、私は基本的に一日中書斎の中にいるため、その環境は外部の自然と仕切られたものである。だが、この開放的な窓を通じて、常に外の景色が視界に入ることによって、書斎と外部の自然との境界線がないような印象を受ける。

書斎と外部の自然とが、まるで一つの開放系システムを構成しているかのようなようである。「絶えず自然の中で仕事に取り組んでいる感覚を持っていたのはそういうことだったのだ」と思った。そうした感覚に付随して、自分の内側から湧き上がる膨大なエネルギーは、結局、天地自然との一体化からもたらされたものに違いない、と思うに至った。そうした恩恵を受けながら日々の仕事に取り組めることがどれだけ有り難いことか。こうした有り難さの気持ちがまた、私を仕事へと駆り立てる。つくづく、自然が目に入らない閉じられた環境で仕事などしてはならない、という思いが強くなる。

自分と外部の自然とが一つの閉鎖系システムを成してしまえば、創造エネルギーが枯渇してしまうことを強く実感する。今後、別の国で仕事をするようになったとしても、絶えず自然との調和の中で仕事ができる環境を選択していきたいと思う。2017/5/28

1111. 行き場のない憤り

昨夜は少しばかり妙な夢を見た。夢の中で私は、高校時代に親しくしていた友人の自宅を訪れた。到着するや否や、友人と共に二階の部屋に向かった。すると、友人の父が彼に「リビングのドアを閉めてから二階に上がってくれ」と声をかけてきた。そのとき、友人の父がすでに成人期を迎えている友人のことを「ちゃん付け」で呼んでいることに妙な違和感を覚えた。しかし、それは友人が幼少期の頃からそのように呼ばれていたのだらうと推測し、妙な違和感を抑えながら私は友人の背中を見ながら二階に上がった。

二階に到着すると、その部屋には小さなキッチンが設置されていることがわかった。友人が親切にも簡単な料理を作ってくれることになった。すると、下から友人の母が私に対して、何か洗い物はないかと尋ねてきた。どうやら私は友人と運動をした後にここに来たらしく、手元を見ると、汗をかいた衣類が入った袋を私は持っていた。

友人の母からの気遣いには感謝をしながらも、友人の家に長居をするつもりはなかった私は丁重にお断りをした。二階と一階の階段を挟んで、そのようなやり取りを友人の母としていると、料理ができ上がったと友人が声をかけてきた。早速、その料理を一口食べてみると、とても美味しかった。料理を食べていると、何やら一階でも友人の父と母がご飯を食べ始めたことが、一階から漂う匂いでわかった。

友人と私は一階に下り、友人の母が作った味噌汁をいただくことにした。すると突然、友人の父が何やら怒号を飛ばし始めた。いったい誰に対して怒号を飛ばしているのか最初はわからなかったが、すぐにそれが自分に対してであることがわかった。何やら、私は友人の自宅に到着した時に、オランダで使っている銀行のカードとクレジットカードを廊下に落としていたようだった。

友人の父は、怒り狂ったまま、そのような貴重品を落とした私を激しく責め立てた。正直なところ、貴重品を廊下に落としたことに対してそれほどまでに責め立てられる理由がよくわからず、少しばかり啞然としていた。しかし、人間の感情というのは不思議なもので、こうした理不尽な怒りにさらされると、こちらまで否定的な感情がムクムクと湧き上がってくる。友人の父の怒りを飲み込んでしま

ぐらいの怒りを伴った言葉を投げかけるのか、それとも友人の父の怒りとは真逆の、一切の波風が立たない湖面のような言葉を投げかけるのか私は迷っていた。

結局私は後者を選んだ。結果として、その場は事が収まった。しかしながら、そうした理不尽な怒りにさらされた私の内側には、もやもやとした何かが残っていた。その後、二階に上がり、友人としばらく談笑をしていたが、自分の仕事に早く取り掛かりたいという思いから、予定どおりに友人の自宅を後にした。

友人の自宅を後にした私は、そこでもまだ内側にうごめく自分の攻撃性のやり場のなさについて考えを巡らせていた。そのような形で今朝は夢から覚めた。

目覚めると、すでに朝日が昇っており、昨日と同様に今日も良い天気となる予感がした。爽快な天気とは打って変わり、自分の内側にある憤りの正体、そしてその行き場のなさについて改めて考えざるをえなかった。2017/5/29

1112. 父と私

昨日、昼食を食べながら、父が会社員でありながらも芸術活動に打ち込んでいた時代のことを思い出していた。父のこれまでの趣味の変遷を眺めてみると、それはインドアとアウトアの双方において多岐にわたっていることに気づく。現在は、写真と短歌を軸とした活動をしているようだ。東京から山口県に移ってからは、長い間釣りに熱中していた。

その熱中振りは私も唾然としてしまうほどであり、何に驚いていたかという、手先の器用さを利用して自らルアーを作ったり、釣りに用いる小道具を作っていたことだ。そして、私が最も敬意を払っていたのは、父が釣りに関する豊富な知識を極めて高度な理論として体系化していることだった。

小さい頃、私もよく父と様々な場所に釣りに出かけ、そこでの体験とその記憶は今ではかけがえのないものになっている。しかし一方で、釣り場に到着した時に、小さいながらもいつも感じていたのは、父と私の二人は周りから浮いているということであった。地元の釣り人とは異なり、私たちの格好は垢抜けており、持っている道具の全てが最新鋭のものであり、その中に最新鋭のものとは変わらな

いぐらいの見た目と質を持った父の創作道具が混じっていた。また、父は山口弁を話すことができないため、釣り場での父と私の会話は標準語で行われていた。

見かけとしても、言葉としても、私たち二人は周囲から浮いた存在であった。父はそのことについて一切気にしていなかったのかもしれないが、特に小学校時代の私はそれについて気にしており、自分が外国人であるかのような感覚、あるいは少なくとも、その環境には見られない異質な存在であるという認識が強かった。

しかし考えようによっては、自分の中で異質性と向き合い、異質性を育むきっかけになったのは、まさに幼少期において父と頻繁に行動を共にしていたことにあるかもしれない。今ではもはや微笑ましいように思うが、未だに父を実家で見ると、山口県の片田舎には見られないような異質な存在だと強く思う。また、父は最新のテクノロジーにも関心があるようで、部屋には様々な機器が置かれており、父の車には、FBIの捜査車両のようなテクノロジーが搭載されているように私には見える。こうしたテクノロジーへの関心が相まって、私にはない絵画的才能を持つ父は、世界に向けてLINEスタンプを今後創作していくことを計画しているようだ。

正直なところ、父にその話を聞くまでは、LINEスタンプの存在を知らなかったし、またそのようなものを個人が作れることも知らなかった。さらには、父は再び小説を書く計画も練っているようだ。父のそうした多趣味な点を私は受け継いでいるのかもしれない、と昼食を摂りながらふと思った。

しばらく私は、午前中に読んだ論文と専門書の内容について振り返っていた。しかし、再び父との思い出が浮かび上がってきた。それは私がまだ東京にいた頃の記憶であった。当時、父はエアブラシを用いて絵画を描くことに凝っていた。

平日は夜遅くに仕事から帰ってくるが多かったが、早く帰って来れる日はおそらく平日の夜に、そして時間の取れる週末は常に、父は自室で絵を描いていた。エアブラシの機器が動く音やエアブラシのスプレーの匂いが、今でも鮮明に蘇ってくる。基本的に、幼少の頃から私も自分の関心事項に没頭することが多く、父が何をしているのかを気にかけることはあまりなかった。それでも、作業をしている父の横に近寄り、父が描く絵をじっと眺めていたことが何度もあったのを覚えている。

父の絵画的な才能によるところも大きいと思うが、会社員であったにもかかわらず、エアブラシを用いた技術はもはや素人のそれではなかった。実際に、父の絵が絵本になったり、銀座や上野の画廊に絵が飾られていたりするのを見ると、その腕前は卓越したものだと思う。

これは私が一昨年日本に戻ってきた時に初めて知ったのであるが、父の実家を訪れ、祖母から当時の資料を見せてもらった時、父が絵画を描くきっかけになったのは私の言葉だったようなのだ。

「お父さん、僕に絵本を描いてよ」という言葉が大きなきっかけとなって父が絵画を描き始めたという事実が、今から20数年以上も前の雑誌のインタビュー記事の中に載っていた。自分がそのようなことを述べていたことを私は覚えていなかった。

いずれにせよ、私の何気ない一言が、父の内側の表現欲求と合致し、それが父の内発的な動機に火をつけることになったのかもしれない。他者の期待に飲まれるのではなく、他者の期待と自らの表現欲求が合致した瞬間に、人は途轍もない内発動機に従って創造活動に従事するのだということを父から学ばされたように思う。

そのようなことを思いながら、私は午後からの仕事に向かった。休日の晴れ渡るフローニンゲンの空を眺めながら、父が今後作る芸術作品と小説を今からとても楽しみにしている自分がそこにいた。

2017/5/29

1113. 冷蔵庫とデイヴィッド・ウィザリントンの論文より

ここ数日の夏のような気温の高まりのせいだろうか、今日冷蔵庫を開けたら、冷凍庫の氷が溶けて水滴を垂らしていた。ここでふと、そもそも冷蔵庫は完全な閉鎖系システムであり、冷蔵庫の温度調節機能によって、中の温度が常に一定に保たれていると思っていた自分に気づいた。そこからさらに、冷蔵庫の温度調節のダイヤルを見るとこれまでと同じ温度設定であったにもかかわらず、冷凍庫の氷が溶けていたのは、やはり外気の温度が上がったことに一つの要因があるかもしれないと思った。

そう考えると、冷蔵庫は完全な閉鎖系システムではなく、外気の温度という外部情報と相互作用を若干行っているため、半閉鎖系システムなのだと思います。これから気温が上昇していくであろうから、冷蔵庫の温度調節ダイヤルをこれまでよりも低めに設定した。

昼食を摂りながら、午前中の読書について思い返していた。今朝は、ダイナミックシステム理論と発達科学を架橋させるためのメタ理論の構築に尽力しているデイヴィッド・ウィザリントンの論文を二つほど読んでいた。私がウィザリントンの仕事に出会ったのは、今からちょうど二年前のことだったと思う。その時に読んだ論文は“The Dynamic Systems Approach as Metaheory for Developmental Psychology (2007)”と呼ばれるものであり、その時に大きな感銘を受けたのを覚えている。

しかし、その論文を読んで以降、ウィザリントンのその他の仕事に触れることは今日まで一切なかった。日々、複雑性科学と発達科学に関する研究を進めていく中で、フローニンゲン大学の特徴からか、科学的な理論や技法について探究することが多く、そもそもそうした科学的な理論や技法の前提に横わたる思想を吟味するというようなことが少ないことに気づいていた。つまり、私の中で、科学的な研究に思う存分に打ち込んでいるという充実感がある反面、科学的な研究をそもそも下支えする哲学や思想に関する探究がおろそかになっているのではないか、という反省があった。

ここで述べている哲学や思想というのは、言語哲学や意識の形而上学などのような大きな領域のものではなく、自分の研究に関する理論や手法と直結する、より小さな領域の哲学や思想のことを指す。例えば、ダイナミックシステム理論を発達科学の研究に適用する二つの異なる派閥が持つ思想上の違いなどである。まさにこの関心が、今日の論文を読むきっかけとなった。ウィザリントンは、ダイナミックシステム理論と発達科学を架橋させることを試みてきた研究者たちの思想上の違いを明らかにし、それらを横断するようなメタ理論を提唱する探究を行っている。

それはまさに私の関心と合致しているものであったため、先週ウィザリントンの主要な論文を10本ほど印刷をした。午前中に目を通していたのは、“How Conceptually Unified Is the Dynamic Systems Approach to the Study of Psychological Development (2011)”と“Taking Emergence Seriously: The Centrality of Circular Causality for Dynamic Systems Approaches to Development (2011)”の二つのである。

二つの論文を読みながら、やはり私も人間の発達に関して科学的な研究をしていくだけではなく、哲学的な研究を合わせて行っていく必要があると改めて思わされた。ウィザリントンの論文は、ここ数日間読んでいたその他の専門書や、現在履修しているコースの課題論文よりも圧倒的に興味が湧くものであり、それは私が人間発達に関する哲学的な研究を激しく行いたいという思いを持っているからだろう。

それらの論文で考えさせられたことはまた別の機会に書き留めておきたいと思う。少なくとも言えるのは、これらの論文で指摘されている論点は、拙書『成人発達理論による能力の成長』の第三章で私がおぼろげながらに主張したいと思っていたことをさらに深く説明するものであった。2017/5/29

1114. 発達段階の存在に関する議論

午前中に読んでいた、デイヴィッド・ウィザリントンの論文の内容を忘れないうちに書き留めておきたい。ダイナミックシステム理論を発達研究に適用しようとする研究者であれば誰でも知っているのが、エスター・セレン、マーク・レヴィス、アラン・フォーゲル、ポール・ヴァン・ギアートの四名だろう。そこに、ヴァン・ギアートの共同研究者でもあったカート・フィッシャーを加えることもできるし、ダイナミックフィールド理論を提唱したジョン・スペンサーを加えることもできる。いずれにせよ、上記の四名がダイナミックシステム理論を発達研究に適用した先駆者であることに変わりはない。

それら四名が持っているダイナミックシステム理論の捉え方と発達現象の捉え方が少しばかり異なる、あるいは全く異なるものを持っている人物がいるということに薄々気づき始めていた私は、それらの違いが何なのかに対して悶々としたものを感じながらこの一年半を過ごしていた。

四人の思想体系の違いを理解するのは一筋縄ではいかなかった。というのも、彼らが築き上げた一つ一つの体系は奥が深く、一つの体系をある程度理解することですら多くの時間を要したからである。また、一つ一つの体系を理解した後に、そこからそれらの思想体系を俯瞰的に眺め、共通点や相違点を捉えながら、一段高度な観点を構築していくことはさらに難しい作業であった。

昨年私が受講していたサスキア・クネン教授のコース「複雑性と人間発達」では、クネン教授が編集した“A Dynamic Systems Approach to Adolescent Development (2012)”というダイナミックシステム理論を発達研究に応用するための格好の手引書を課題文献の一つとしていた。本書の中で、ポー

ル・ヴァン・ギアートを筆頭にフローニンゲン大学の研究者が確立した「フローニンゲン学派」と呼ばれるグループの発達思想と、エスター・セレンとリンダ・スミスらが中心となって確立した「ブルーミントン学派」と呼ばれるグループの発達思想が比較されていた。

実はこの書籍を購入したのは、三年前のことであり、当時二つの発達思想の違いについて書かれた箇所を読んでも、その違いが全く理解できなかった。しかし、昨年のコースを通じてその違いが明確なものとなり、その違いについては以前の日記で書き留めていたように思う。そこから私が直面していたのは、フローニンゲン学派とブルーミントン学派のみならず、それらの学派が掲げる発達思想とアラン・フォーゲルやマーク・レヴィスらの発達思想とどのような違いがあるのかという問いだった。ある意味、その問いに対して方向性を与えてくれたのがウィザリントンの論文であった。

細かな説明になることを避けるため、四名の思想体系を大きな観点で比較すると、実は、フォーゲル、レヴィス、ヴァン・ギアートは同じ思想区分に属すると括ることができ、セレンのみ異なる思想区分に分類される。両者の区分の違いは存在論的なものであり、発達段階の存在を認めるか否か、別の言い方をすれば、ピアジェの発達思想を受け入れるのか否かの違いにある。端的に述べると、セレンだけが発達段階の存在を否定している。

私はウィザリントンが論文で主張している考え方に今のところ同意しており、セレンの発達思想には一つ大きな問題がある。そもそもセレンを含め、四名の研究者が活用しているダイナミックシステム理論の根幹には、「創発」と「自己組織化」という二つの概念があり、それらは対をなしている。つまり、ダイナミックシステム理論の根幹には、「発達とは自己組織化を通じた創発である」という考え方があるのだ。セレンもこの考え方を採用しているのだが、そもそも「創発」というのは、新たな構造パターンが自発的に生じることを指す。

そして、新たな構造パターンは不可逆的な特徴を持っており、それがシステムの新たな要素となってシステムは絶え間ない自己組織化を通じて発達していくのである。まさに、ピアジェが提唱した「発達段階」というのは、自己組織化を通じて生まれる創発構造に他ならないのだ。セレンは、創発や自己組織化という概念を採用しているにもかかわらず、自己組織化を通じた創発によって生まれる新たな構造パターンを否定するという事態に陥ってしまっている。システムを構成する多様な要素

の相互作用によって生まれる構造パターンを蔑ろにするというのは、ダイナミックシステム理論の本質とは相容れないものである。

今日からウィザリントンの論文を10本ほど読むことによって、ダイナミックシステム理論と発達科学を取り巻く思想問題について自分なりの考えをより醸成していきたいと思う。2017/5/29

1115. ある僧院での出来事

昨夜の夢の中で私は、美しい日本庭園にいた。その庭園には、僧院のような一階建ての建物があつた。その中に入ると、三方が蔵書で囲まれており、入り口と対面側にある壁は全てガラスで覆われていた。入り口から建物の奥へ進んでいくと、美しい青々とした笹が風で揺れているのがガラスの壁を通して見えた。

どうやらこの建物には部屋が一つしかないらしく、到着した広々とした部屋だけがこの建物の全てだった。部屋には長机が三つほど列を変えて並べてあつた。一番後ろの長机に一人の男性が座っており、真ん中の長机に別の男性が座っていたので、私は一番前の長机に腰掛けた。ガラスでできた壁の一角がホワイトボードになっており、その前に一人の講師らしい人物が立って何やら講義を始めた。

講義を聴き始めると、それが万葉集か古今和歌集に関するものであることがわかり、この僧院のような建物の中で日本古来の和歌について話を聞くというのは感慨深いものがあつた。しかし、その講師が突然おかしな英語を話し始めた。そして、真ん中の長机に座っている人物にその講師から英語で質問が投げかけられた。その講師の英語は日本人独特の訛りが強く、講師が投げかけた質問を聞いた時、何を言っているのか私もわからなかった。

真ん中の長机に座っている人物も講師の質問がよくわからなかったようであり、首をかしげていると、講師が何度も繰り返し日本語訛りの英語で同じ質問を投げかけ始めた。その様子を見て、私は興奮していた。

講師も諦めたのか、質問を投げかけるのをやめ、今度は数学の問題をホワイトボード上で解説し始めた。その問題は、何やら日本の大学入試における数学の問題を彷彿とさせるようなものだった。

しかし、それにしては平易な問題であった。ここでようやく私は、この僧院が企業人の留学支援をするための場所であることに気づいた。

夢の中で認識の飛躍が起こり、この僧院は、日本の大手の製造企業の工場の一角にあり、この工場働く人の中で海外留学を志す人がこの僧院に通って勉強をしていることがわかった。そうした気づきを得た後、その講師を一瞥すると、何やらその平易な数学の問題に手こずっているらしく、手元にある解答と自分の解答が合わないことに動揺しているようだった。

講師が題した答えは「160」という数字だったが、それは単純に単位の変換ミスであり、答えは「780」であることに講師も気づいたようだ。苦笑いを浮かべながら講師は慌てて正しい答えに修正したところで、私は僧院から突然消えて別の場所にいた。

その次に私がいたのは、へんてこなタクシーの中だった。そのタクシーは、僧院と同じく、三つの座席列で構成されていた。運転席の横に一人の見知らぬ人物が座っており、私は真ん中の座席列に腰掛け、一番後ろの座席列に別の見知らぬ人物が座っていた。どうやらその方たちは、先ほどの僧院を保有している大企業で働いている従業員のようなようだった。すると、一番後ろの座席に座っていた人物が、「今年は留学ができそうにありません」とつぶやいた。

それを聞いた一番前の座席に座っていた人物は、何があったのかを確認する問いを後部座席の人物に投げかけた。どうやらその人は、志願した大学の全てから入学許可を得ることができなかつたらしい。留学候補先の中に、オランダの大学院が2校ほど入っていることに私は関心を持ったが、私は黙ってそこに座っていた。すると、一番前に座っていた男性が突然日本語から英語に切り替えて話し始めた。

それに合わせて、後部座席の男性も英語で話を始めた。私は、「また始まった」と思った。耳につくような日本語訛りの英語がタクシーの車内を飛び交う。すると突然、一番前に座っていた男性が私に英語で話しかけてきた。仕方ないので私も英語で返したが、私の返答によって、それ以降、二人の人物は英語を話さなくなった。そこで私は夢から覚めた。

目覚めてみると、自分の身体の感覚が少し重たいことに気づいた。寝室の窓から朝日を拝むことができ、窓を少し開けると、ひんやりとした爽快な風が部屋に流れ込んできた。2017/5/30

1116. 井筒俊彦の『コーラン』の読みから

昨日の夕方、その日の仕事を全て終えた私は、久しぶりに井筒俊彦先生の全集を手を取った。慶應義塾大学出版会から刊行された全集の第11巻「意味の構造」を何気なく開き始めた。

「碩学」というのは、井筒先生のような方のことを言うのだと改めて思った。初めて井筒先生の仕事に触れたのは、私が大学生の頃であったから、今から十年ほど前のことになる。その時の私は、経営学や経済学を専攻としており、なぜ井筒先生の『意識と本質』を購入していたのか定かではない。当時、その書籍で展開されている言語体系に全く馴染みのなかった私は、何が書かれているのかを理解することなど到底できなかつた。

この十年の間、私は、アメリカの思想家ケン・ウィルバーの仕事の探究やジョン・エフ・ケネディ大学への留学を含め、意識の形而上学の探究に随分と携わってきた。そうしたこともあってか、一昨年あたりから、井筒先生の書籍の内容が自分に内側に染み渡るように流れ込んでくる感覚がある。昨日もそのような感覚があった。しかし、こうした感覚をもってして、井筒先生が構築した体系を私が理解し始めたとは受け取ってはならない。

先生の書籍内容が自分の内側に流れ始めたというのは、一つの巨大な体系を理解する道の最も初期の段階にすぎない。そのようなことを思いながら、全集の第11巻を読み進めていた。この巻で扱われているのは、イスラム教の聖典『コーラン』である。先生の名訳からだろうか、『コーラン』の持つ重みのようなものが文章から滲み出ている。

また、『コーラン』の様々な警句や喩えを読みながら、思わず笑みがこぼれるようなことが度々あった。私は決してイスラム哲学の研究者ではないのだが、それでも井筒先生が行った『コーラン』に対する意味論的分析から得るものが多くある。

書かれていることを覚えようとするような馬鹿な読みをすることはせず、研究対象にどのように向かっていくのかの知的操作の方法を汲み取るような読みを心がけている自分がいた。特にテキストの読み方に関して、これまでの私は、一つのテキストが他のテキストとの連関によって織り成されたものであるという性質上、複数のテキストを横断しながら一つのテキストを読んでいこうとする傾向があつたことに気づかされる。

この読み方は珍しいものでもなんでもなく、学術論文を執筆する際は特にこのような形で、複数の論文や書籍を横断しながら文章を執筆していくことが求められる。しかし、先生がここで試みているように、あえてテキストの連関性を脇に置き、一つのテキストを単独のそれとみなして精緻に解釈をしていくことも重要だという認識に至った。まさに、先生が「いわば『コーラン』を構成する鍵概念を、『コーラン』自身に解き明かさせる」というような読み方である。

毎朝の習慣となっている、イマニュエル・カントの“Critique of Pure Reason (1781)”を読む際にも、とにかくこの一冊のテキストが扱う種々の概念を、他の書籍と関連づけることなく、それを精緻に読み通すことによって、それらの意味が自然と立ち現れるような読みを心がけたい。つまり、カントの言葉の意味がカント自身の書物から完全な形で現れてくることを実現させる読み方である。

久しぶりに井筒先生の書籍を手にとったからか、新鮮さと共に引き込まれる感覚に襲われ、一気に第11巻の半分ほどを読み終えていることに気づいた。この夏は、井筒先生の仕事ともゆっくりと向き合っていきたいと思う。2017/5/30

1117. 人間の残虐性と正義心について: 埴谷雄高著『死霊』の到着

日本のアマゾンを通して注文した、埴谷雄高氏の主著『死霊』が6月2日までに届くということが注文時の情報に記載されていた。

今日、私は大学からのキャンパスの帰路、その書籍がなぜだか今日届くような気がしてならなかった。いつもの通り、ノーダープラントゾン公園を通過して自宅に戻ろうとしていると、公園の池のほとりに無数の鳥が群がっている姿が見えた。水際にたたずむ無数の鳥を眺めていると、池の向こう側から一羽のアヒルが何かから逃げるようにしてこちら側に向かってきた。そのアヒルのすぐ後ろを見ると、種類の異なるアヒルが三羽ほどそのアヒルを追いかけていることがわかった。

追いかけていたアヒルは全身が白色の毛で覆われており、そのアヒルを追いかけていた三羽のアヒルは、全身が黒色の毛で覆われており、頭部は緑色をしていた。最初私は、種類の異なるアヒルが戯れているのだろうと思った。だが、その場に足を止めて観察を始めてみると、様相がまるっきり異なることに気づいた。三羽のアヒルは、白いアヒルの背中をくちばしで激しく突き始めたのだ。中

には白いアヒルの首元をくちばしで激しく突いているものものいた。集団暴行がその場で行われているにもかかわらず、他のアヒルたちは全く知らぬ顔で水際にたたずんでいた。

攻撃されているアヒル、攻撃をしているアヒル、そして傍観する無数のアヒルの姿は、私たち人間の姿と何ら変わることがなく、その様相は人間社会の縮図のように思えた。白いアヒルが何とか逃げようと地面を走り始めたが、追いかける黒いアヒルの方が足が速く、再度背中をくちばしで突かれた白いアヒルはその場に倒れた。倒れた姿を見るや否や、三羽の黒いアヒルが一气呵成に白いアヒルの全身をくちばしで突き始めた。その姿を見たとき、自然界に自らの手を加えることをためらっていた私も我慢ができなくなった。

すぐさまその場に駆け寄り、三匹の黒いアヒルを追い払った。幸いにも白いアヒルに怪我はないようであり、その白いアヒルはすぐさま池の対岸に向けて飛び立った。すると、三匹の黒いアヒルがまたしても白いアヒルの後を追いかけるように飛び立った。私にできることはもう他に何もなかった。

池を後にした私は、歩きながら、たった今日撃した光景とその時の自分の内側の感情について思いを巡らせていた。それは自分の内側に確かに存在する残虐性と正義心であった。この相容れない二つの感情が、あの光景を目撃していた時の私の内側で偽ることができないぐらいに鮮明に立ち現れていた。それに気づいた時、私は自分自身に対して少しばかり怖くなった。

あの光景を眺めていた時、私は間違いなく、あの三匹の黒いアヒルをはるかに凌ぐほどの残虐性を持ち合わせていた。一人の人間の心の奥底には、ある種の戦慄をもたらすような残虐性が存在しているのだと思わざるをえなかった。

昨日とは打って変わり、今日は鬱蒼とした雲が空を覆っている。動物的な残虐性以上に破壊的な人間の残虐性について、私は歩きながら引き続き思いを巡らせていた。たった一つ、そこに光が差し込めたのは、あの時に自分が取った行動だった。あの行動の拠り所はなんだったのだろうか。

それは「倫理」と称することができるような、あるいは「正義」と称することができるようなものだったと思いたい。動物同士の争いに人間の手を加えるか否かを逡巡し、あれこれと思惟を働かせることが全くもって馬鹿げており、全くもって無意味なことだと思った。そこで大切なのは、動物界においても適用されうるであろう倫理的判断、あるいは正義心に則った行動だったように思う。

そのようなことを考えていると自宅に到着した。入り口のドアを開け、螺旋階段を上って自分の部屋に戻った瞬間に、妙な胸騒ぎがした。「今日がその日だ」とわかった。

私は幼少の頃から音に敏感であり、ちょっとした音に対しても驚いてしまう。今もその傾向は変わっておらず、そのため、私は家の呼び鈴がならないように、その電源を絶えず切断している。しかし、今日は自分宛に荷物が届くような予感がしていた。

まさに、『死霊』が届くことを予感していたのだ。ゆえに呼び鈴が鳴るように設定し直し、昼食を摂り終えて専門書を読み始めてしばらくすると、呼び鈴が突然鳴った。届けられたのは、埴谷雄高著『死霊』だった。2017/5/30

1118. 言葉を超えたその先

埴谷雄高著『死霊』が届いてからの私は、自分の心と向き合わざるをえなかった。書籍が届けられた時、分厚い封筒から中身を取り出すことをせず、私はソファの一角にこの書籍を置いた。あえてその書籍を見ないようにするかのよう、私は複雑性科学と教育哲学を架橋させることを試みた“Complexity Theory and The Philosophy of Education (2008)”という専門書を開いた。そして、昨日からの続きを読み始めた。二章ほど読み終えたところ、再びソファに目をやると、当たり前だが、封筒に包まれたままの『死霊』がそこにあった。

これから心理統計学に関する論文を二つ読み、井筒俊彦先生の全集の続きを読もうと思っていたが、居てもたっても居られなくなり、中身を熟読しないことを誓いながらその封を開けた。すると中から、息をのむほどの美しい装丁を伴った分厚い書籍が姿を現した。それは分量としても、中身としても、ウィルバーのSES、エマーソンの全集、プラトンの全集、スピノザの全集と同等のものだと即座に理解した。

姿を現した『死霊』の中身を恐る恐る開いた後、気づけば二時間弱の時間が経っていた。本来であれば、夏の休暇を利用して読み始めるつもりであった本書を今日から少しずつ読むことにした。埴谷氏が本書の中で追いかけた一つの主題とそれから派生する副主題のどれもが、私を捉えて離さないものと類似しているがゆえに、私はこの小説を手にとることになったのだと思う。作品の中身に

入る前に、全集に付されている小冊子をくまなく読み、その後、埴谷氏が執筆した序文を読み始めた。

埴谷氏は、自らの思想を結晶化させる一語を求めて、50年にわたって本作の執筆を続けた。その一語に極限まで近づき、結局それを掴み損ねた時、まとまった言葉になりえぬものを作品の中で表現する際に漏れる感嘆詞「あっは(ach)」と「ぷふい！(pfui)」が異様な響きを伴って私の内側に流れ込む。正確には、「あっは」という感嘆詞は私の内側と共鳴するようなものであるのに対し、「ぷふい！」という感嘆詞は依然として私の内側にとって未知のものであるようだ。

気づかない間に、私はこの作品の奥深くに入り込んでいた。その証拠に、封筒を開けた食卓から一歩も離れることができず、この小説を読み耽っていた。二時間ばかりの時間が過ぎ、私は我に返った。

この作品が我が国始まって以来の形而上小説と呼ばれるゆえんの一端をすでに覗き込んだような気がした。また、人間の観念の奥の奥には、今の私では知りえぬ世界があるのだということにも気づく。フローニンゲン大学での一年目が佳境を迎え、最後の慌ただしい時期に入っているため、焦ることなくこの作品と向き合っていきたいと思う。2017/5/30

1119.『成人発達理論による能力の成長』の主題の断片

少しばかり、あの七日間について振り返っていた。第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』の原稿は、昨年のクリスマス前の七日間を使って書き上げた。毎日およそ2万字ほどの字数を目安に執筆を続け、七日かかって本書の原稿が完成した。前作『なぜ部下とうまくいかないのか』は、時期を同じくして、一昨年のクリスマス前の月曜日から金曜日にかけて原稿を書き上げた。

原稿を書き「上げた」と記述したが、実際にはすでに頭の中にある何かを上から下ろしてきたかのよように文章を書き進めていたと言った方が正確だ。自分の頭の中に形としてある全体的なものに対して、単に言葉を与えるだけでいいような、そのような感覚で生み出されたのが前作であり、また今回の作品でもあった。

第二弾の書籍に関して、あの七日間の期間において、私は何を考えていたのだろうか。言い換えれば、あの時の私は何を訴えるためにこの書籍を執筆したのだろうか。そのようなことを少しばかり考えていた。振り返ってみると、各章ごとに伝えたいテーマのようなものがあり、それらを統括するような一つの主題があるようだ。その主題について考えていたところ、一つには「成長を希求しないことの重要性」あるいは「思慮を伴った実践と支援の重要性」を伝えなかったように思う。

とにかく、現代に蔓延する成長至上主義的な風潮に対抗するかのごとく、成長・発達することの本質的な意味を問うような問題意識を読者の方と共有したかったのだと思う。世の中の至る所で、成長の重要性を訴えるような書籍や実践が見られる。果たして、私たちは本当に成長など必要なのだろうか？そのような問いこそが、まさに本書の根幹に横たわっている主題だ。

本書のタイトル、そして内容の表面的な装いは、さらなる自他成長を促すことを主張しているように思うかもしれない。しかし、本書の中の節々で述べているように、自己や他者がさらに成長していくことの意味や目的について冷静に考えて欲しいという思いが常にあった。

現代社会で展開されている成長に関する議論や実践は、どれも思慮が欠落しているように私には思える。思慮の欠落を指摘し、思慮の伴った実践を提唱することが本書の主題だったに違いない。

私たちは、成長の本質というものを見過ごしがちである。私たちは成長することによって、これまで抱えていた課題を解決することができるのは確かである。ある段階から次の段階に到達して初めて、既存の段階の問題が解決されるというのは、まさに発達の肝だ。だが、発達の肝はそれだけではない。

もっと重要な肝がある。それは、私たちは成長することによって、その瞬間の自分には到底解決できないようなさらに大きな課題が突きつけられるということだ。「私はより大きな課題を求めているため、成長に伴って新たな課題が突きつけられることは問題ではない」という主張は、相当に馬鹿げているし、成長の要諦を掴み損ねている。私たちが真に成長を遂げた時にやってくる新たな課題は、そのような呑気な主張を漏らす口がふさがってしまうぐらいの実存的なものなのだ。

それは解決の糸口が一切見えないものであり、それが課題であることすら認識できないような、まるで課題の中に溺れてしまうような感覚を伴うものである。解決の糸口が見えず、課題そのものが自

己になるということこそが、成長に伴う新たな課題の本質である。そして、これは組織においても社会においても全く同じである。組織が成長すればするほど、社会が成長すればするほどに、組織や社会は解決がより困難な課題に直面するのである。

個人の成長も集合の成長も、その本質は同じなのだ。絶えず絶えず、全く手には負えないような課題が次から次へと訪れることが、成長することの持つ本質的な意味である。それは、天国へ向かうような道では決してなく、地獄の中を歩く道であるかのように思える。しかし、それでも歩かなければならないのが、私たち個人であり、私たちを取り巻く組織や社会の宿命なのだ。

常に私たちは、直面する課題に劣後している。その劣後の溝は時代の変遷と共に拡大する一方であるがゆえに、私たちに求められるのは思慮の伴った実践だと思うのだ。成長それ自体を求めるために成長実践を行うのではなく、地獄の中を歩くために思慮の伴った成長実践が不可欠なのだ。他の個人と共に、組織や社会と共に前に進むためには、成長の本質を掴んだ思慮の伴った実践が絶対に必要だ。私はそのような思いを共有するために、あの七日間を過ごしていたのだと思う。

2017/5/30

1120. 認知的な夢

早朝目覚めると、寝室の窓を通じて、清らかな空に昇る朝日を見た。五時半の起床と共に書斎の窓を開け、清々しい朝の風を最初に浴びた。

昨日の夢の印象がまだ身体にまとわりついているのを感じる。それは決して悪い夢ではなく、極めて「認知的な夢」と表現できるものだった。夢の中の私は、夢の中の自己の視点を通じて世界を眺めていたのではなく、覚醒意識と全く変わらない視点を持っていた。つまり、それは夢を見ていたというよりも、心の眼を通じて心の内側を覗き込んでいるかのようなようだった。

夢の中には誰一人登場人物が出てくることもなく、そこには何枚かに連なる白紙の原稿があった。その原稿に私は日本語で文章を書いていた。だが、あるところから突如として英語の文章が混じり始めた。その地点から英語に完全に移行したのではなく、英語と日本語を行ったり来たりしながら自分の書きたいことを表現していた。

夢の中で日本語を書いている私は、呼吸をするかのごとく日本語の言葉を紡ぎ出していた。一方、英語の文章を執筆している私は、とても神経質に一つ一つの言葉を選びながら文章を組み立てていた。その姿は建築性の塊であると言ってもいい。一つ一つの建築素材を組み立てる私の意識はとても慎重であり、執筆した文章の意味がどれほど自分が表現しようとすることに合致しているのかの体感を確認するために、何度も文章を音読していた。

いよいよ原稿の最後の箇所到达了時、自分が書き記した英文の意味が自分でも理解することができず、ひどく狼狽していた。ここで直面していたのは、「感覚に対する言葉の劣後」という現象だった。

そういえば、昨日の就寝前に、日本語ですら、自分の感覚を正しく表現するための語彙を自分はまだ持ち合わせていないことに対して反省していた。「毎日、日本語をより真剣に学ばなければならない」という言葉が就寝前の私の頭の中に何度もこだました。

私が言葉に表現できる以上のものが、絶えず自分の内側にあることを常に自覚するようになってからしばらくの月日が経つ。私の言葉よりも常に先行する私の感覚が、日本語をより深く学ぶことを私に突きつけてくる。それは言うまでもなく、英語を含めた他の言語についても同じである。最後の文章を自分の内側の感覚にピタリと合致するまで何度も何度も文章を書き直していると、そこで一度目が覚めた。

時刻は早朝の二時半だった。未明に目覚めた時、自らの言葉をさらに鍛錬していく必要性、さらなる言語的修練の必然性を思い知らせた。涼しい外部の気温とは打って変わり、私の身体は少しばかり汗で濡れているようだった。2017/5/31

【追記】

自らの思考と感覚を英語空間の中で構築するようになってから、六年ほどの歳月が過ぎた。六年経ってみて、ようやく自分の内側の思考や感覚の機微を英語で表現できるようになり始めていることを知る。六年前、“indignant”を“indignant”として英語空間で経験したことのない私に、“indignant”を“indignant”として英語で表現できる日が来るのかを絶望的に感じていたことを思い出す。

そこから六年が経ち、不可能に思われたことが可能になり始めているのを知る。同時に私は、より徹底的に英語空間の中に思考と感覚を晒さなければならないことを知る。

これからの私の仕事は、そこを通らなければ成しえないものだということを強く自覚している。また、それは英語のみならず、母国語についても同様の態度で臨まなければならない。

私はこれからの十年、二十年、いや一生を閉じる日が来るまで、少なくとも英語と日本語の鍛錬を
行い続けるだろう。2017/6/12